

第5回 九月二十六日(土) 二時から

ケア労働と

BI(ベーシックインカム)

同志社大 経済学部教授 山森 亮さん(ゲスト)

今回の哲学カフェでは、同志社大学経済学部教授山森亮さん(著書に「ベーシックインカム入門」(光文社)「貧困を救うのは社会保障改革かベーシックインカムか」(人文書院))から、ケア労働とベーシックインカムというテーマでお話をいただきます。ベーシックインカムとは、すべての人に無条件で一定の所得が保障されるべきだという考え方で、今までの社会保障や社会福祉、あるいは労働の考え方について新しい視点を提供するものとして、この数年、世界的に脚光を浴びてきているものです。

お話の中で、イギリスのフェミニズムの運動において、一九七〇年代に、労働者階級出身の女性たちが「要求者組合運動」を通して、社会保障給付のあり方を批判し、中産階級のフェミニストたちとの軋轢を乗り越えて、その中で、ベーシックインカムの要求をかがげようになった歴史がたどられます。

彼女たちは、女性が男性の扶養に頼ることなく、自

立して自由に生きる権利が認められていない社会の変革を求めると共に、そのためには、さまざまな資産調査や労働能力調査を必要としない、個人に「無条件に一定の所得を保障する」制度が必要だと考えるに至りました。(「女性は、勇気をもって、自らの権利を主張すべきである。扶養や提携といった事柄は、手当の図式の範囲の外部にあるべきである。雇用されているか非雇用であるかに関わらず、すべての個人は保障された最低限の収入を明確な法的権利を伴った権利として受け取るべきである。児童手当は、この権利のトップに掲げられるべきであり、毎日子供たちのケアに責任を持つ人に対して支払われるべきである。」)

このようなイギリスのフェミニズム運動の歴史の中で、とりわけ興味深いのは、「ベーシックインカム」を要求するグループが「家事労働に対する賃金の支払い」を要求するグループを批判したときの考え方です。

「私たちは、私たちがそこで暮らしたいと思う種類の社会のために戦いたい。これは、私たちの主要な視点である。ここが、私たちが「家事労働の賃金」の考え方に同意できないところである。それは、家庭において女性たちによってなされる仕事を、その愛情労働という畏から脱神秘化し、資本に仕えるその役割を認識することを要求する試みかもしれない。しかし、それは、私たちの母としての、家庭の主婦としての、性の対象としての役割における、生産に必要な社会関係の再生産者としての私たちの機能については、何も語っていない。女性たちの闘争にその外部から持ちこまれた要求として、それ(*家事労働に対する賃金の主張)は、この闘争が、しばしば労働力の再生産者としての女性の役割の認識をこえて進むという事実を否定

する。このことは、その要求の性質と役割について全体としての疑問を引き起こす。」
ここ(しばしば労働力の再生産者としての女性の役割の認識をこえて進む)には、非常に深い視点が示唆されているように思えます。この「ベーシックインカム」の運動にかかわった女性たちにとって、子供のケアという労働、あるいは、社会関係そのものを再生産するものとしてのあらゆるケア(*ケア労働は、労働であると同時に、否応なく、愛情であったり、友愛であったり、絆であったり、いわばいわゆる(裏面へ)

ZOOMでご参加ください

mojyaking@hotmail.co.jp にメールを
ください。

本文には

- ①「お名前」当日は匿名可ですができれば本名を)
- ②「哲学カフェに参加します」のみで結構です。

2020年の問答連・哲学カフェは
第5回を以って最終回となります。
多数の皆さんのご参加をお待ちしています。



「労働」ではないものと連続的であるという特殊な性質を持つています（を、単に金銭的に評価したり、（労働力の再生産の費用として）支払い労働とすること自体が運動の目的ではなかったのです。そこで問題にされていることの一つは、人と人とのきずなを維持するための協働やケアや愛情といったもののすべてを、資本制社会における等価交換の図式でとらえようとするものがもたらす歪みだったのではないのでしょうか。

彼女たちは、「所得」を狭い意味での労働や生産の視点でのみとらえることのゆがみを批判し、すべての人が、一人の個人として、その尊厳にもとづいて評価されるための基礎的な条件として、ベーシックインカム（ベーシックインカム）の理念をとらえていたと思えます。ベーシックインカムを単なる社会保障給付の代替原理としてだけではなく、人と人との絆や労働の意味を、資本制社会の経済原理とは異なった視点からとらえなおし、支払い労働と支払われていない労働、そして本当に人間にとつて必要な労働？や貢献？とは、何なのかという点を考えるためのヒントとして、みんなで、話し合えたらと思います。

第四回「わたしとわたしたち」の感想

相手を肯定的な評価することについて、肯定が行き過ぎると差別になると思った。例えば障がい者を生きているだけで凄いとしような考え方をする者が、ノーマライゼーションを謳っている昨今でも多くいる。相手（障がいを持つ人）に対して、肯定的な評価はしているが、差別しているとも捉える。今回は人と人と

の間の線引きがメインテーマだったと思うが、一つのテーマをみんなで話し合うときにも、線の引き次第で話の方向性が決まると感じた。また、人は状況によって線の引き方を変えると思うので、人と人との間の「線」は多次的なものかもしれない。（M）



昨日はいろいろ考えることができました。まず最初、出題者の方が問いにしてお話されましたが、残念ながら私はこの機会に皆さんと何について対話したいということか解りませんでした。「わたしとわたしたち」という話題について、例えば「内なる優越思想の解消」「最適な区別や差別とはどういうものか」等、まず主題となる言葉を挙げ、それを問う理由や考える方向等、例を交えて説明していただければわかり易かったと思います。また、ラインの関係で言葉が聞き取れないとか、問われていることへの答の主旨が解らない意見が多く、それをいちいち尋ねるのもどうかと遠慮し、そのままにしてみました。進行役の方はそれが解り、いずれそれについて発言者に尋ね直したりを整理・解説したりされるか、と期待して、あまり言葉を挟まないようにしてましたので、結局最後までわからず終わった印象でした。ともかく貴重な機会、ありがとございました。（F）

最初に議論の前提を混ぜ返すようなことを言っています。自分と他人の違いに対する否定的評価（差別）という個人レベルの問題と、差別構造という歴史的・社会的な問題は、絡み合っているけど直結していません。だから、日頃は潜在しているのが、何か契機があると「本音」として噴出するのだと思います。

果たして解決法はあるのでしょうか、分かりません。（M）
今回のようなテーマは私にとつてとても難しく、二十代の頃に読んだ吉本隆明の「共同幻想論」の自己幻想、対幻想、共同幻想の概念を「わたし」「わたしたち」「共同体」と捉えて考えてみました。勿論、対幻想はペア（家族、友人、恋人）間ですが、有名な「共同幻想と自己幻想は逆立する」という言葉を思い出しました。個人を守るための共同体が、個人を束縛し、社会的ルールが強制し、極まれば、国家が戦争で個人が死ぬことを殉教だと賛美する構図のことである。自己幻想はそれぞれ、自分にとって「ほんとう」の世界観で人の数だけ多様で、まさしく各自にとつて生きる理由になつており、決して一括りにはできない。その世界像がその人の生にとつてよい意味を与えているかどうかが問題である。一国の総理大臣があんな人たちには負けないと国民を目の前で線引きし、東京都知事が沖縄県知事をあの人には日本語がわかるのかしらと揶揄する。これだけでも、私は守られているとは思えない。（O）

初めて「ZOOM」で参加しました。前回会場「ムレック」で「ZOOM」での参加方法を知り今回参加しました。テーマの「わたしとわたしたち」という内容を社会的な概念で説明されておられたと思いました。私的な意見ですが、純粋な「わたし」というのは、あまり「意味」をなさないように思えます。発言した時も言ったかもしれないが、「さまざまなかみ」の中での私」というのが具体的な「意味」をもちます。（N）

初めて「ZOOM」で参加しました。前回会場「ムレック」で「ZOOM」での参加方法を知り今回参加しました。テーマの「わたしとわたしたち」という内容を社会的な概念で説明されておられたと思いました。私的な意見ですが、純粋な「わたし」というのは、あまり「意味」をなさないように思えます。発言した時も言ったかもしれないが、「さまざまなかみ」の中での私」というのが具体的な「意味」をもちます。（N）